

「至人不留行」

「情熱の人・坪内逍遙」展に寄せて

(財) 逍遙協会理事 菊池 明さん



「至人不留行」 坪内逍遙絶筆 昭和10年(1935)1月

今年坪内逍遙が亡くなって70年、「みのかも文化の森」では、かなり大規模な展覧会が計画されています。展示目録を拝見すると、逍遙の生涯、多彩な業績がよく纏(まと)められていて、その開会が楽しみです。

文芸、演劇に対する逍遙の一貫した姿勢は、時代の推移を客観的に見極めた上で、自

己の立場を定め、改革と創造の信念のもと、古きよきものを守りつつ新しきものを創造する、そして一旦理論を構築すると、全力をあげてその実践に邁進(まいしん)することでした。

明治18年(1885)、小説



坪内逍遙博士顕彰会

行うとともに、逍遙公園の完成を祝いました。以後、郷土の偉人である坪内逍遙先生の功績を後世に伝えようとするさまざまな活動を行っています。

坪内逍遙博士顕彰会は、昭和31年5月「坪内逍遙博士の遺徳と業績を顕彰して、郷土文化の発展に寄与する」ことを目的に設立されました。

昭和37年1月には、坪内先生の親族や関係者をお招きして、逍遙顕彰碑の除幕式を



昨年の「しのぶ会」(2月28日)

また、逍遙先生がご縁で、熱海市で行われる「逍遙記念祭」にも、参列させていただき、当地の人々とも交流を深めています。

逍遙先生の功績を、ふるさと美濃加茂市の貴重な無形の財産として、後世に伝え顕彰していくことは、私たちの大切な務めだと思っています。

話 坪内逍遙博士顕彰会 佐光辰巳さん

逍遙先生と父清次郎



鈴木清次郎さんは、明治39年に太田町で初めて写真館を開業された人です。

永井露子さん(太田町)

た。昭和34年には、早稲田の演劇博物館にも出掛け、逍遙先生が愛用されたいすにも座ることができ、ご満悦だったことを記憶しています。

明治38年(1905)、文芸協会の発足に当たって演劇部門を担当しましたが、同42年(1909)からはその責任者になり、自邸内に自費を投じて演劇研究所を開設し、新時代の俳優の養成に乗り出しました。そして、松井須磨子ら研究生の卒業を期に、同44年(1911)からは劇団活動に入り、シエークスピア、イブセン

の作品を次々と上演して行きました。これは逍遙の画期的な事業で、将来の日本演劇の創造を目指した雄大な目的を持っていました。第一回公演は逍遙訳「ハムレット」でした。逍遙は、後にシエークスピアの全訳という偉業を成し遂げますが、当時はこの上演によって、日本の新演劇のための大きな糧(かて)、刺激となることを意図したものでした。文芸協会は不幸にして短命に終わりましたが、後大正の新劇全盛時代を導き、日本演劇の発展に寄与したことに大きな意義があります。



カット 高橋和男さん

大正・昭和に入っても、逍遙の意欲、情熱はますます盛んで、創作劇、舞踊劇の発表、歌舞伎劇、芝居絵の研究などのほか、実際活動でも、地域の活性化、民衆への芸術普及を目的とするパーシエント運動、家庭への芸術普及を図る児童劇活動を推進し、またこのころ登場した新しい芸術、映画にも関心を示しています。

逍遙は晩年、好んで色紙などに書いたものに「至人不留行」という句があります。

出典は「莊子」で、「時に随つて変じ、物に因りて動く」という意味ですが、進歩と独創を生涯の信条とした逍遙の理想をよく表したものとさえまじゅう。



父は、この写真が大変お気に入りでした。写真館のウインドウには、いつもこの写真を自慢げに掲げていました。こつしたことがご縁で、早稲田大学にも招待されまし

(財) 逍遙協会理事 菊池 明さん

今回の特集を企画するにあたり、特別寄稿していただきました。

5 写真は、昭和34年早稲田演劇博物館にて撮影。左坪内逍遙の愛用したいすに腰掛けている鈴木清次郎。右は、早稲田演劇博物館館長河竹繁俊。